

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和56年度番組「展覧会のあと」

ゲスト4: 下町レトロに首っ丈の会さんとおかんアーティストの皆さんをお招きした回のうち、#15のテキストです。

○河原 おかんアートって何という質問を最初にしたかったんですけど、していなかったですね。まあ、結構、このラジオを聞いてくれる方は、もしかしたら既にギャラリーで展覧会を見て、おかんアートを知っているかもしれないんですけど、おかんアートって何ですかね。どういうものを。先ほどからいろいろ、「軍手人形」のこととか「ロールちゃん」とかというキーワードが出てきているんですけど。

○山下 そうですよ。何か、実は私、ちょっと皆さんに聞きたいことがあって。おかんアートって一般的に最近言われてはいるものの、皆さん、手芸、結構技術を持っていらっしゃる方もいらっしゃる、それでおかんアートチームに、まあチーム名としておかんアートなんですけど、それぞれにとっておかんアートってどういうもんなんかというのと、自分の作品がおかんアートってくらわれることに、正味どない思っているのかっていうのを、もう腹を割って今日聞きたいなと思っています。(笑)

○河原 ぜひ聞いてみたいですね。

○山下 私も聞きたいです。

○河原 作っている方々がどう感じているのかとか。

○山下 そうです、そうです。

○藤岡 本当に、自分もやっていて、おかんアートって何やろっていうところがあって、今までにでもこの会議の中で、会議いうのか話し合いの中で、手芸とおかんアートの違いとかね、いろいろ考えて言葉に出したことはあるんですけども、まだつかめておりません。それが、おかんアートやと思います。つかみ切れない。

○伊藤 あっ、つかみ切れない。

○藤岡 きちっとしたものもそうだし、ちゃんと袋物、使える、きちんと。それで、私が作るみたいなのも、まあいいやんっていう、これでもうっていうのと、基があって、それから発想して、自分なりの工夫をしていったりでできるものかなというのと、パーフェクトなものを求められるのではないとい

うところだけ、ずっと生かしておいてほしいです。(笑)

○河原 なるほど。自分の作る。

○藤岡 きちんと。そうそう。

○河原 結構あれですよ、機能的なものもあるし、機能的じゃない、「何だろう、これは」っていうものもある。すごく幅のあるものですよ、ものづくりとして。

○新居 機能的も、押しつけの機能的やね。(笑)

○一同 (笑)

○河原 すごく面白いアイデアがいっぱいありますもんね。

○藤岡 きちんとしたものだったら、やっぱりどこかで糸糸を買うてくる、何かを買うてくる、糸を買ってくる、針がどないこないっていうのをそろえて、新しいものっていうんだけど、私の発想の中には、何かここで使えそうなもの、私も今、かまぼこ板を使っているんですけど。(笑) この最近しゃべっているんですけど、かまぼこ板が一枚板で、私の持っている家具が集成材やっていうのに気づいたときに、あのかまぼこ板が捨てられなくなって。(笑)

○新居 かまぼこ板、高いね。そう思ったらね。(笑)

○河原 結構専門的な話ですね、今のは。建築的なね。

○藤岡 建築家がおりますので、その辺は気にしないと。

○河原 すごく面白い。

○山下 いや、おっしゃるとおりやと思います。かまぼこ板は1枚もんですね。

○新居 そうやんね。もろね、合板と違うもんね。

○河原 そうですね。

○藤岡 だって、水を含んでどないかなるとか。もちろんアイスの棒もそやけど、あれ何でできているなんて、湿気ないというか、ぐちゃぐちゃになる。(笑)

○山下 確かに。めっちゃめっちゃ専門的な話。

○藤岡 そんな変な疑問を持ったりして。要するに捨てられない、ものが捨てられなくなって、香坂さんのあの家の写真じゃないですけど、うちもこないなっています。

○河原 なるほど。

○伊藤 もったいないっていう気持ちがありますか。

○藤岡 そうそう、もったいない。

○伊藤 もったいない気持ち大きい。

○藤岡 放るって何やろうって思ったときに、かまぼこ板は1枚板やし、こっちは集成材で、軽くて

安くというて買えるから、何かで要るときはそっちを買ってしまうけども、「何やねん、このかまぼこ板1枚」となったときに。

○河原 何かすごいな。

○藤岡 気がついたら、だから、ほかのものにもいろいろと捨てられないものが。ただ、それは自分が食べたとか、何かに乗っていた後とかっていうのがあるから、普通にアート見てくださいみたいな席だとそれが出せるんだと思うけども、何か買ってもらう商品となったときには、普通のお店みたいなどころには出せない。おかんアートやから出せるいうたら失礼なかも分からないですけどね。(笑)

○河原 (笑)

○藤岡 おかんアートやから「これ、かまぼこ板なんです」って言いながら出せるというところが、許してもらいたいという。(笑)

○河原 なるほど。うまく使いどころを分けていくという。どうですか、西村さん。

○西村 私は、最初に、おかんアートって何やなと思って。それで手芸ばっかりやから、お母さんばかり集めて、趣味とか手芸とかを作る意味かなと思って、それで行ったら、「おかん」いうたらお母さんやったでしょう。「ああ、そういうことか」と思って、お母さん方がみんな手芸を作るということで、皆さんが作るの、どういうものを作っているんやろうと思って、私、こんなおかんアートに入っているんやろうかと最初は思うとったんやけど、そうしたら、それこそウエダさんからいろいろ、何でもいよとか何とかして、ちょうど私の父が手芸をものすごい好きな人やで、それで父からちょっといろいろ教わって、お父さんがドングリ拾うてきたりして、石拾うてきたりして、しとった人やから、「ああ、こういうことを作るんや」と思って、それで私ももうちょっと何点もいろいろと、それで、皆さん、私が手芸ができるのを知っているから、要らんもんみんな持ってくるから、ごみがたまるとるような感じで、家の中が。

○河原 (笑) 素材というか、ごみというか。

○西村 着物の端ぎれから、もう何か作れるもの、それこそガチャガチャのボールとか、そういうなんをいっぱいもらって、そんなん何を作ろうかいなと思っていろいろ考えて、そうしたら何かもうええわと思ってそれを放っておく。そうしたらアイデアが浮かんでくるんですよ。「あっ、そうだ、あれがあったんだ」とそれを出してきて、いろいろこしらえて。それこそ、東京に行ったときなんかのコーヒーのカップも、あれもみんなが持って帰って何か作りやええわいって、ごみをもらって帰ってきて、「ごみだよ」いうことで。

○河原 すごいですね。だから、価値のなくなっちゃったものに、何か新しく価値をつくるようなこと

ですもんね。

○西村 だから、もう皆さんな、「私のところ、ごみ集めしている人と違うよ」言うて。(笑)

○伊藤 集まってくるんやね。

○河原 何かにしてくれるんじゃないかっていう。

○西村 娘は娘で、ちょっと居酒屋さんみたいなところに行ったらね、だから、「お母さん、こんな貝があるけど、こんなん使う」とか言って、「もらってくるけど」言うて、もういっぱい持って帰ってきて。それはもうそのまま置いてあるんよ。(笑)

○河原 お店の人もちょっとびっくりしますね。持って帰りたいんですけどみたいな。

○西村 何でもコーヒーのフレッシュやらアイスやら。(笑)

○山下 アイスの入れ物。

○藤岡 そうそう。

○西村 藤岡さんじゃないけど、かまぼこの板やないけど、フレッシュからペットボトルから、もうみんな置いて。ちょっと置いとこうと。それで、この間も、ワークショップで新居さんが一回作ってはったから、「ああ、これやったらこれもあるな」と思って、この間、京都のほうに皆作って持っていつてん。

○新居 帽子かな。帽子。

○西村 帽子。

○山下 うんうんうん。

○西村 ペットボトルじゃなくて、あれは何や、ヨーグルトの蓋や。ペットボトルやったらちょっと大きいからいうことで。

○河原 ああ、帽子になりますね。(笑)

○西村 それで、ペットボトルの蓋はちっちゃいのが集まらへんから、今フレッシュ集めとる。(笑)

○山下 ちっちゃいのあるもんね。かわいいよね。

○西村 フレッシュのほうはそれで何かできるかなと思うて、今ちよつと集めてんな。

この間もちょっと、情報センターのほうで手芸のクリスマス会があったもんで、トイレの芯を2センチメートルぐらいに切って、クリスマスの帽子、サンタさんをこしらえて、皆さんにプレゼントしたら、めっちゃ喜ばれて。

○河原 やっぱり季節物を作りますよね。

○西村 もうそういうなんも、ほかすものがないんですよ。もう何でも、着物でも何でもできるわと思って、私もそういうがらくたばかり集めております。(笑)

- 一同（笑）
- 新居 変わったんです。持ってくるのが、自分から集め出した。（笑）
- 一同（笑）
- 河原 すごいな。ありがとうございます。
- 西村 これが父がおったら、またいろいろ教えてくれるやろうけどね。父だってそういうことが好きやから、これがこっちのほうに人がおったら、私もおかんアートに入れとると思う。
- 山下 男子がね。
- 西村 家の近く、神戸に住んでいたら、私もおかんアートに入れたいぐらい。
- 山下 お父さん、一緒にしたかったな。
- 西村 もう一緒にアイデアを考えてもらうように。
- 河原 すごくキャラが濃そうですね、お父さん。
- 西村 何せ若い人が好きやから、女の人が。（笑）
- 一同（笑）
- 西村 ポケットからいろいろ出して、作ったもの皆ポケットいっぱい入れて、ドラえもんじゃないけど。
- 山下 くれはるんですよ。
- 西村 若い人がおったらもう、すぐ誰でも。「あんた、知っとるの」って聞いたら、「知らん」って。（笑）
- 新居 香坂さんもね。
- 西村 山下さんもようけ。
- 山下 頂きましたね。手を握って、こうぐっぐっと持たしてくれはりますね。
- 河原 そうか。
- 新居 それはすごいうらやましい。本当にすばらしい。それ、おかんアートよ。だから、私がそうだったんよ。
- 河原 おかんアートの、特徴が。（笑）
- 新居 もう誰にでもあげるといふか、バス停で待っている人にあげるといふ。（笑） 何でやねん。
- 河原 よく配る、あげるっていうのを聞きますよね。僕もらったりしましたが、キーホルダーとか。
- 新居 それ心がけたいと思いつつ、すぐ忘れるな。（笑）
- 河原 その領域は、またちょっと違うんですかね。

- 新居 そう、あれぐらいにならないと駄目なのかしら。(笑)
- 一同 (笑)
- 新居 まだ雑念があるんよ。(笑)
- 河原 雑念が。(笑)
- 新居 私たちには。(笑)
- 河原 結構、素材は捨てられたものとかを使ったり、自然のものを使ってエコなものだし、作ったものを、作りすぎちゃったら配布をし出すみたいなのが、今、何となくおかんアートの要素には。(笑)
- 一同 (笑)
- 河原 なってきてはいますね。池田さんとかはどうですか、最近入って。
- 池田 おかんアートっていうのは、昔からみんな認識せずに、結構、私らの世代ぐらいのもうちよっと年いった人とかやったら、何か作ってはるんですよ、家で。
- 新居 だから、尾本さんがやっていたら手芸屋さんで。
- 池田 私も行っていました、春名に。
- 河原 ああ、手芸屋さん。
- 西村 私もよう行ったよ。
- 池田 お会いしたかは覚えていないけど。
- 尾本 覚えていない。全然覚えていない。
- 池田 よく行きました。
- 河原 いろんな人が来るお店。
- 新居 やってはるの、作って教えてくれるっていうね。
- 池田 だからきっとそういうの、だから、今時々「ケンミンSHOW」でやっているでしょう、おかんアートいうて集めているの。そうしたら、みんな何やかんやいって、あるんですよ。この間ね、言うたんやけど、タマネギネットがあるじゃないですか。あれをつないでね、エコバックにしているんです。「これは軽いね、ぬれてもええしね」いうて。そやから、そんなことをしている人っていっぱいいるけど、その人たちはこれがおかんアートやなんか認識していないんですよ。
- 河原 確かに。
- 池田 だから結構、昔、私らの世代っていうのは、そういうのが何か家にきつと何個かあると思うんです。意識せずに、何か毛糸余ったんで作ってみたとか。
- 新居 それをね、今、私たちの、さっちゃんといろいろ分析してんねん。それをやらなかった人

と、結構家庭に入っている人はやっていたというように、分野がね。

○池田 そうやね。それで、好きな人は、やっぱり嫌いな人ってそんなことしたくもないという人。でも、大抵何かそういう、好きな人は、興味ある人は……

○新居 そういう機会もなかったっていうのもあるかもね。

○池田 そうそう。何かそういうもので、何か作っていると思うんで、みんなそういう認識はね、これがおかんアートやなんて思っていないけど、何か多分、家の中探したら毛糸で人形……

○新居 タオルで何かニンテルとかね。

○池田 そうそうそう。タオルで人形作って、手拭き作ったりとかね。私も毎年、干支作っていたんですよ。それこそ、あそこの春名のあれ買ってきて、それでみんなに配っていて。もう年末だっていったら、手がすごい痛いぐらい作っていたんですけど、もう一通り行ったから、もういいやんないうてやめにしたんですけど、だから、私も作るともうあげていた、みんな。家にあってもしょうがないから。

○河原 すごい。じゃあ、もうチームに加入する前から、もう野良でやっていたっていう。(笑)

○池田 うんうん。

○河原 (笑) 自然にやっていたんですよ。すごい。なるほど。新居さんとかはどうですか。

○新居 私がするのは、それこそ香坂さんのを見て開眼したというか。(笑) もうこき下ろすように、師匠なんですけど「こんなんあり得へんわ」とか言うて。(笑) でも面白い。あの人がやっているのがすごく面白くて。本当にいろいろな人にあげるというか、何のためらいもなく、ずっとあげているっていうのはね。それがね、悪いんだけど、押しつけかもねっていうように私は思っていたけど。

○河原 (笑)

○新居 でも、決してそうじゃないなっていう感じがして。それで、私も、初めて香坂さんに会ったり、皆さんの作品を見たら、「あっ、うちにあったわ、あのマイちゃん人形」っていうように。(笑) それで、やっぱり捨てていないんです、私は。引き出しを開けたら本当に入っている。(笑) それで、もうころっと変わりました。何か目の見方っていうか、目線が変わった。全然、多分ね、気にしていなかったんです。「こんなんつけるの恥ずかしいし」とかいうように思って。(笑) 今、いっぱいぴらぴらつけているし。(笑)

○一同 (笑)

○河原 がらっと変わったというか。

○新居 そうなんです。最初はね、そうだったんです。それから、もう本当に、言ったらみんなが毛糸は持ってくるし、もう本当に困っている人がいっぱいいるんです。お年寄りで、もうたんすという

か押し入れにいっぱい入っていて、もう施設に入るからどないかしてというのが、2回ぐらい目にうちに回ってくるっていう。そのもらった人も困っている。「いや、もう、それならもったいないし、もらっとくわ。何かに使えるし」っていう。もういっぱいなんです。(笑)

○河原 だんだん皆さんのたんすがぱんぱんになってきているという。

○新居 それで、やっぱり、これは1回は何かにしてあげないとかわいそうって。このまま私が死んだら、絶対、家族なんてもう燃やしてしまうか、何かになっている。だから、捨てる。そういうのになつたら、せつかくここに、きれいになったり、毛糸になったり、何かになってきているんだから、1回でもよみがえらせてあげようと思って、もう、1回使ったらそれでいいと思うぐらいの気で作り出したんです。だから、私は、もう売れるようなものじゃなくて、自分でも笑いながらいつも作るんです。(笑)

○河原 笑いが重要って、何か前におっしゃっていた気がしますね。

○新居 自分が面白がって作っているっていう、そういう姿勢で、日々早くなくなれって思いながら、物がね。素材が。(笑)

○河原 なるほど。

○新居 でも、捨てないです。これぐらいのでも、やっぱり置いてんのよ。香坂さんに怒られたよね、前。捨てていたら。全部もうちゃんと回収して、「また使える、何かに使える」って言って。だから、フェルトのちっちゃいのも、もういっぱいあるんだけど、使っているよな。また、何かに。

○藤岡 本当に、東北へ行かせてもらったじゃないですか、3年目か4年目ぐらいに。香坂さんも一緒に行ったときに、香坂さん、さるぼぼっていうのを四角い生地、それを最初もう3センチメートル角もないかあるかというような生地もちゃんと残して、それで持っていったら、向こうのお母さんが「それ、下さい」って。次の日に作ってきてはった。ちっちゃい、これぐらいのさるぼぼにして。

○新居 それは、すごく認識したね。だって、押し入れのものが全部なくなるんやって思ったら、糸も針も何もなくなって。

○藤岡 それを聞いたんやな。流されたから。そのときに、その一人のお母さんのところに大学生の女の子がボランティアで来てくれて、「何が必要」言うたら、「針も糸もないから、針と糸」って言ったら、もう学校で、中学か何かで裁縫道具ってあるじゃないですか。買いますでしょう。あれを送ってくれたっていう話をしてくれて、「ああ、そうやったんや」って。私たちが行かせてもらったときは、辛うじてどこかに100均やったかな、何かね、1か所だけ手芸用品を置いてあるところがあつたりしたんですけども、まあ、それからはちゃんと……

○新居 そのできるまでは何もなかったんよね。ショッピングセンターができたらね、その中に。

○藤岡 それで、新居さんとそんなことを聞いたから、みんなから生地を集めて向こうに送って。

○新居 送ったね、いっぱい。

○藤岡 送って、そうしたら、ちゃんとお母さん方、その次のときかの展示会に……

○新居 つりびなのまりかな。

○藤岡 非売品ですよ。何かを作ってくれて。私が送った布でバッグが作ってあったんですよ。もう泣けそうやったわ。

○山下 すごいわ。

○藤岡 作家さんおられなかったからね、話ができなくて。いや、これって思っ。そう思ったら、みんな、神戸で提供してくれた人が、誰がこの生地を、誰がこの生地をいうて私は覚えていなかったなと思っ。きつとね、友達とか知り合いの人が出してくれた布で多分作ってはったんやろうけども、そこまで覚えていなかったなと思うのが、いまだに残っている。残念やったな思っ。

○新居 それはいいんじゃない。みんなが一緒に使ったらいいんだから、それ、こだわったらあかん。

○藤岡 それをね、誰かに伝えられたら。「あんたにもろうた生地で、お母さん作ってはったよ」っていうのが言えたらね。

○河原 ああ、伝えられなかったんですね。

○藤岡 もうぐるっと回るじゃないですか。そうしたら、神戸で出してくれてもと思う。その伝達方法が何かないかなって。いまだに残っています。

○河原 なるほど。ちょっとこのラジオで。

○藤岡 そうですね。

○河原 少しでも広がるといいですね。

○新居 そう、それを想像したらね、もう本当にありがたいと思う。私たちが持っているのだから、いかに。(笑) 1回でも何かに作ったら。

○藤岡 そうそう。作ったら、私らがもうこんな要らんわと思っっているようなもんも、どこかではそれが必要とされている。今、フードロスとかいろいろね、言われているから。

○河原 ありますよね。過剰梱包とかね。ごみがいっぱいある。特に、日本はそういうのが問題になっていますけど。だからこそ何か忘れかけているようなことを、今すぐ言われたような感じがします。ごみもごみじゃないって。いかに使えるって。いかに。

○池田 なくなって、初めてありがたみに気がつくといか。豊富過ぎるから、あつて当たり前やもんね、今はね。それがなくなったときのことを考えたらね。

○藤岡 何かそんな、おかんアートに携わっていたから、そこにも行かせてもらって、そういうのも見てこられたという、いい経験とっていいのか、そういうことも分かってん。

○新居 というか、フットワークが軽くなったよな。

○藤岡 要するに、捨てるものとか要らないものを何とか利用しようかっていう工夫する……

○新居 というか、このおかんアートのこのグループというかな、この雰囲気、もう本当に居心地がいいというか、いろんな機会が見られる、いろんなことが見られる。それも面白い。

○伊藤 私、多分ね、思ったことを形にしたいんですよ。自分が想像したのを形にしたいだけなんですけど、でも、何か商売していたらね、やっぱりあかん日もあるんですよ。お客さんが来うへん日とかね。そういうときに「まあまあ」と思うけど、手芸やっても、一応完成したら達成感は。

(笑)

○一同 (笑)

○河原 そうですよ、完成したら。

○伊藤 完成したらね、それでプラマイゼロなんですよ。あかんかって、「今日はよう頑張った」というんで終わるから。どうなんかな。というか、あんまり私もほんまに考えていないんですけどね。(笑) 何せ材料どないかせなあかんのと、1個作るも10個作るも一緒なんですよ。

○河原 えっ。

○伊藤 一緒なんですよ。

○河原 一緒。作業量が10倍ではないんですか。

○伊藤 やけど、買うんがね、1個買うたら全部できるから、生地でもね。買ったら、50センチメートル買わなあかんかったりしたら、どうせ作るんやったら……

○山下 そう、おかずと一緒に。

○伊藤 おかずと一緒に。(笑)

○一同 (笑)

○河原 いっぱい作っておいて、冷凍しておいてとか。

○伊藤 いっぱい作っておいて、取りあえず。それもこつこつやる。それも義務みたいにやるときもあるんですけどね。それが、あのハットリくん108まで行ったの。(笑)

○一同 (笑)

○河原 壁に。

○伊藤 壁に。

○河原 物すごい、壁に。

- 伊藤 止まらへんですよ。誰も止めてくれへんから、もう。(笑)
- 一同 (笑)
- 河原 (笑) なるほど。
- 伊藤 それで、一日中しゃべっているんですよ、やっぱり客商売なので。全くしゃべりたくないんですよ、夜。(笑)
- 一同 (笑)
- 河原 終わった後の夜、作りますもんね。
- 伊藤 そうなんです。全くしゃべらないけど、それを黙々と作るんですよ。それで、「ああ、ええわ。ようやく」って思う。(笑)
- 河原 充電しているっていうか。
- 伊藤 そうです。そんな感じです。
- 河原 すごいですね。
- 伊藤 そうなんですよ。
- 河原 何か労働者が酒を飲んで寝るみたいな。
- 伊藤 あっ、という感じ。そう、そうです。ちょっとリフレッシュじゃないけど。(笑)
- 河原 リフレッシュして。(笑)
- 新居 私が毛糸の籠のあれを作ってるのもね、毛糸がいっぱいあるから、もういかに消費するかっていうのが……
- 伊藤 そうですよね。分かる。
- 新居 それとお菓子のパッケージとかああいうのが、もう本当に毎日のように出るでしょう。
- 伊藤 そうなんですよね。
- 新居 それがいっぱいあんな、今も。段ボールじゃなくて、そのパッケージ。それが消化できないの、あれが一番いいと思って、あれも黙々やねん。同じ。もう何か、もうっと、もわっと作んねん。(笑) おかしいん違うか、どうすんねやろうって。(笑)
- 伊藤 ハイになるんでしょう。ハイになるっていうか、ランナーズハイみたいに。
- 新居 10個ぐらい、ぶわっと作るねん。
- 伊藤 やり出したら、二、三個ぐらいで調子乗ってきて、それで、10個ぐらいまで行って、何で作ったんやろうって。(笑)
- 新居 またできてしまった。(笑)
- 伊藤 増える理由ですよ。

- 河原 気づいたらできてしまっていたみたいなの。
- 伊藤 そうそうそう。
- 新居 それも、やりながらも結構私はね、考えんねん。「この配色でいいかしら」「このぐちゃぐちゃの毛糸でいいかしら」とか。(笑) 何でこんなん考えんねやろうと思いつつも、またわ一つと作って。(笑)
- 伊藤 あれ、フリーハンドでやり続けると、線が見えてくるんです。(笑)
- 一同 (笑)
- 河原 (笑) すごいですね。ミケランジェロみたい。
- 伊藤 もうね、分かる。見ていると、もう光っているの、線が。(笑)
- 一同 (笑)
- 伊藤 何もないのが……
- 河原 もう石の中に形が見えるっていう。
- 伊藤 見えるっていう。それを切って、全部それをずっとやり続けたら、そこまで行きますよ、もう。(笑)
- 新居 そうそう。私もキュートのあれを作るのに、箱を……
- 伊藤 分かりますよね。
- 新居 切るのが、もう感覚で分かってくる。
- 伊藤 感覚で分かりますよね。
- 新居 うん。型紙も何もない。
- 伊藤 本当に線がね、そこに浮かんでくるんですよ。(笑)
- 一同 (笑)
- 伊藤 誰に言っても多分ね。
- 藤岡 脳がおかしくなっている。(笑)
- 河原 (笑) かもしれない。すごいな。
- 新居 多分それ、いいんよ、脳のためにね。(笑)
- 伊藤 多分。
- 新居 肩凝ってそうやけど、リラックスしてんねん。(笑)
- 伊藤 それで、やれって言われたもんじゃないから、多分。
- 新居 そうそう。
- 河原 なるほど、なるほど。

○伊藤 これを測って、これをつて言われたら、もう多分、頭痛いと思うんですけど。自由やしね。完成度が低いのあるじゃないですか。そうしたら、やっぱり入りやすい。(笑) すごい見てまうと、あら、これはちよつと。

○新居 お手本がないからね。(笑)

○伊藤 お手本がないから、何かすごい見てまうと、「わあ、これは無理やな、作られへんな」と思うんですけどね。何か、みんな何かちよつと「ああ、これやったらできるかも」ぐらいのやつやったら、作れるかなとかって思ったりするんですよ。

○河原 なるほど。結構、でも、あんまり手芸しない僕からすると、全部何かしら難しそうなんですけど。

○伊藤 そうですよ。

○河原 そこがすごい絶妙な、緩く見えるんだけど、実はすごく細かい縫いがされているやつとかありますね。

○伊藤 皆さん、やっぱり手芸をやっている人はうまいです。やっぱり細かいし、今言われていたマイマイ人形っていうのも、やってみたら分かるけど、めっちゃ難しいんですよ。(笑)

○河原 (笑)

○伊藤 めちゃくちゃ難しいですよ。

○新居 ようすると思わん。(笑)

○伊藤 数学的な頭がないと、ほんまできないんですよ。

○河原 編み図、すごいですよね。

○伊藤 すごいですよね。

○河原 都築さんと見て、何だろう、これは。読み解けない図で。

○伊藤 そうなんですよ。

○河原 これを皆さん見ているんだと思って。

○伊藤 それを口で教えてくれたら何となく分かるんですけど、あれ見て、あれせえって言われたら。だから、すごく高度なことをやっていますよね。

○河原 うん。

○伊藤 すごいと思う。やってみて分かるんですけどね、本当に。「ああ、こんな難しいんや」って。

○河原 その辺どうですか、オールラウンダーの尾本さんは。

○山下 尾本さんのはおかんアートなんて言っているんだらうかっていう。(笑)

○伊藤 でも、最近、寄せてくれているんです。(笑)

- 新居 そうなの。(笑)
- 一同 (笑)
- 山下 逆に寄せてくれていて、申し訳ない。
- 伊藤 手をこうね、ゆるくしたり、かわいいねん。
- 新居 かわいいんよね。
- 河原 緩く。
- 伊藤 そうそう、緩く。
- 河原 すごいですけど。
- 山下 そこを聞きたいです。寄せてくれているところを聞きたい。
- 伊藤 寄せてくれているところ。
- 河原 どうですか、おかんアートのこの活動というか、チームは。
- 尾本 私は、それこそ四、五十年前に春名手芸店に就職してから手芸をし出して、それで、ハマナカなんかには講習を受けに行っていて、それを、受けてきたものを、私は先生となって春名手芸店でみんなに教えてね、あのキティちゃんにしてもロールちゃんにしても、みんな私は先生で教えたほうなんです。それを皆さんが物すごく緩くして、すごく世の中に広めてくださる。(笑)
- 一同 (笑)
- 尾本 私はとつてもきちょうめんで。(笑)
- 一同 (笑)
- 山下 売らなあかんもんね。
- 尾本 そうそう、お店だからね。
- 伊藤 教えるんもちゃんと教えて。
- 尾本 そうそう、とつてもきっちり教えて。
- 山田 きっちり教えてもらっていました。
- 尾本 それを、だから香坂さんなんか随分来てくださって、春名で習ったものをそれこそあちこちで広めて教えてくださって。だから、もともときちょうめんだし、きれいに仕上げるのが私の役目だから、おかんアートのこの緩さは、私にはちょっと合わなかったんですけど。(笑)
- 山下 そうなの、めっちゃめっちゃ聞きたいですもんね。
- 尾本 でも、伊藤さんの面白いのとか、新居さんのすごくはっちゃけたお人形さんなんかを見て、物すごく面白いなと思うようには最近なってきた、ちょっと自分も作ってみようかなと。
- 伊藤 でも、かわいいですよ、めちゃくちゃ。作られるのは、やっぱり。

- 山下 めっちゃかわいい。
- 伊藤 めっちゃかわいいですよ。
- 尾本 お仲間に入れていただいて、もうすごく楽しいですよ、人生が。(笑)
- 一同 (笑)
- 山下 泣けそうです。(笑)
- 尾本 こんな年になってね、こんないろんな楽しいことを。東京も連れていってもらったり。もう本当に楽しいなと思っています。ついていこうと思っています。(笑)
- 一同 (笑)
- 尾本 老いては子に従えじゃないですけど、私はついていきます。(笑)
- 河原 (笑) すごい。しっかりした技術面は、結構尾本さんが皆さんにお伝えしつつ。
- 伊藤 やっぱり見たら分かるんですよ。刺しゅうなんかね、裏見てください。下手と上手がすぐ分かるんですよ。(笑)
- 一同 (笑)
- 伊藤 刺しゅうは裏見たら、「わー、下手な人がやってる」って。皆さんの技術なんか、めっちゃきれいですよ。何させてもきれい。だけど、細かいのを見たら「まあ、これ下手やな」っていうのもあるんですけど。
- 河原 なるほど。
- 伊藤 でも、やっぱりお上手ですよ。
- 河原 そんな尾本さんに誘われた山田さんはどうですか、参加して。
- 山田 私は、もう本を見てね。割とずっと、若いときから、編み物が好きで。編み物をするとな、黙々とできるんですよ。周りを気にしないでいいし、一生懸命編んでいましたけど。
- 伊藤 でもね、アマビエ様をね、手袋の指でね。
- 山下 上手に作っていらっしゃる。
- 伊藤 それは載っていないけど、自分で考えて。
- 山田 そうそうそう。
- 河原 へえ。
- 伊藤 コロナのときにアマビエ様を……
- 山田 アマビエさんって、私全然分からなかったんです、何か。それをね、尾本さんに連れていってもらってね、それでアマビエさんを作りって尾本さんに言われてね、アマビエさんってどんなもんか分からへんかったんよね。そうしたら、「足が3つあってね」とか言われて。それで、大きなん

はあかんよって言われて。(笑)

○一同 (笑)

○山田 コロナの時期にね。

○伊藤 そう、分かってはる。

○山田 そうして、それを聞いただけで一応作って。

○伊藤 すごいすごい。

○山田 こんなんでいいのとかね。

○新居 そこで講習してもらってんね。それで、「簡単や簡単や」言うて、もうめっちゃくちゃしんどい。(笑)

○伊藤 すごい、めっちゃしんどいと思う。もう、あれって。

○河原 難しい。

○新居 だから、おかんアートっていうのを簡単そうにいうんです、みんな。簡単やけど、めっちゃ苦労している、本当は。

○河原 そうなんですよね、実はね。

○新居 でも、こんな簡単やねんって、いつも。(笑)

○山田 うん。口癖。

○伊藤 そう、おじゃみでもね、難しいんですよ。八面体だけやけど、分かん。どこをどうしとるか。こうね、こうやってこうやってやるんですけどね。本では理解はできるんですけど、やっとなら自分、どコルート取ったら、分かん。

○山田 おじゃみ。

○藤岡 うん、おじゃみ。お手玉。

○山田 お手玉ね。

○伊藤 あれをみんな、ば一ってされる。

○山田 あれは、もう簡単ですよ。(笑)

○一同 (笑)

○河原 簡単ですって。(笑)

○伊藤 4枚であれを作るんが……

○山下 だって、あれ立体やもんね。

○伊藤 立体やもん。難しい。

○山田 分かんことがあったら、すぐ尾本さんところに。(笑)

- 一同（笑）
- 山田 近いのでね。
- 河原 ああ、なるほど。いいですね。
- 山田 分からんことがあったら……
- 新居 アドバイスしてもらおう、上手に。
- 伊藤 教えてもらえるのがいいですね、やっぱりね。
- 河原 皆さん向上心がすごいですね、何か。アレンジして、自分のものにしていこうとするっ
ていうか。それはすごいなと思って、聞いていて。
- 西村 だから、皆さんお互いに教え合っこしているから、誰にでもね。
- 尾本 うん。そうそう。
- 伊藤 テーマを与えたら、みんな何でも作れると思いますよ。本当にその独自の……
- 河原 流行のものとか、季節のものとか。
- 山下 時代もね。
- 河原 振り返れますもんね。
- 山下 ちゃんと、うわー、すごいな。
- 河原 伊藤さんはもともと手芸をしていなかったんですか。
- 伊藤 でもね、やっていました。フェルトで人形。ちょうどはやった時代なんですよ、フェルト人
形が。あんなん作ってましたよ、やっぱり。
- 河原 そこから山下さんと出会い。
- 伊藤 うん。そうですね、その間はね、多分中学ぐらいでもう全然作っていなかったと思うん
ですよ。それで、会ったときに、本のキティちゃんをね、キャンディーズみたいに売っていたんです
よ。（笑）
- 一同（笑）
- 伊藤 1つ450円で。
- 山下 450円やったんですね。へえ。
- 伊藤 それで、あれ見たときに……
- 山下 でも、あれ買ってきはったんですね。
- 伊藤 そう。それで、私も作れるかなと思って作ったら、上手にできた、ごっつ。（笑）
- 一同（笑）
- 伊藤 それから100体くらいずっと作ったんですよ。（笑）

- 一同（笑）
- 伊藤 一応、何でも100体。
- 河原 切りがいいところで。
- 伊藤 そこまで作ったらやったって言えるかなと思って。（笑）
- 一同（笑）
- 河原 すごいな。
- 伊藤 そこから、ヤクルトの空き容器にはまる。
- 山下 そうやった、そうやった。
- 河原 はまるんですか、素材に。
- 伊藤 何かはまんねんね。あれね、何かヤクルトさんがね、100個ぐらい買ってきて、そのお礼の気持ちで空き容器を取っていたんですけど、あの形ってね、やっぱりね、こけしなんです。
- 藤岡 うん、そうやね、そうやね。
- 伊藤 だから、すごくやっぱりね、バランスがよくて。
- 河原 立ちやすいついていうことですね。
- 伊藤 顔と体のバランスが、こうちょっと区切っているんですけどね、あれがね、やっぱりこけしをあれしているから、本当に作りやすくて。それをずっとまた、それも100ぐらい。いろんな種類がね。
- 新居 こけしに凝ってはったもんね。
- 山下 赤穂浪士もあり。赤穂浪士のシリーズがありましたね。
- 伊藤 ワールドカップがあつたら、ワールドカップも全部。
- 河原 ラグビーの選手とかも何か作っていましたね。
- 山下 そうでしたね。
- 伊藤 リーチ・マイケルだっけ、ひげついたり。（笑）
- 一同（笑）
- 山下 それだけで分かりましたもんね。（笑）
- 伊藤 それだけなんですけどね。（笑）でも、それもまあ必要。いや、それも誰に見せるわけでもないんですよ。
- 山下 そうなんですよ。
- 伊藤 そうそうそう。自分で置いとるだけ。だから、もうえらいことになっちゃった。（笑）
- 一同（笑）

○河原 そうですね。淡路屋の二階、すごかった。

○伊藤 どんだけ、淡路屋むちゃくちゃ、あれからもっとひどくなって。(笑)

○一同 (笑)

○河原 なるほど。僕が多分2年ぐらい前に行かせてもらったときも、何か別世界っていうか、すごかった。

○伊藤 そうなんですよ。それでね、わざわざね、白い手袋をつけてくださるんですよ。(笑)

○一同 (笑)

○伊藤 いいから。いい、いいって。(笑)

○一同 (笑)